

地域社会における近代教育と 生業への参加過程

戦前の宮城県気仙沼市の事例から

The Process of Participation in Schooling and Livelihood
at Local Communities : A Case Study of Kesennuma City,
Miyagi Prefecture before the World War II

川村清志

KAWAMURA Kiyoshi

- ① 問題の所在と「尾形栄一日記」について
- ② 尋常高等小学校から公民学校への軌跡
- ③ 農作業への従事
- ④ 漁業への参加と展開
- ⑤ 子供から大人へ

【論文要旨】

本論は、家制度や同族の繋がりが残る村落社会の慣習と、学校や軍隊を含む近代的な諸制度とのせめぎあいのなかで、個々人がどのように社会化していくのかを問い直す。そのために近代社会における子供の成立とそのメカニズムを問う視点と、村落社会における子供の社会化やその象徴的な位置づけを探る民俗学的な視点を併用しつつ、昭和初期の東北の三陸地方で得られた事例の検証を行いたい。

以下では、ローカルな民俗文化と近代社会の諸制度を対立的に捉えるのではなく、両者が相互に影響を与えつつ、生きられた生活世界を描き直したい。検証する日記資料は、宮城県気仙沼市内の小々汐集落で2011年の東日本大震災後の文化財レスキューを通じて見出されたものである。日記資料は1932(昭和7)年と33年(昭和8)に、当時、10代半ばの少年によって記されたものである。この資料の分析は、約一世紀前の気仙沼の地域文化の推移を読み解くことにもなり、震災によって失われた文化の多様性を析出し、現代の地域社会へ送り返す作業にもリンクしている。

本論の構成は以下の通りである。1節で日記の著者である尾形栄一氏と彼が残した日記の概要を説明する。2節では栄一氏が記す学校での経験を日記より抽出し、就学状況とその特質について整理する。3節では日記に記された尾形家の農業に関する記述の検証を行う。4節では、同じく尾形家の家業の柱であった漁業への携わり方について検証する。以上の点を踏まえて最後の5節では、栄一氏が、教育制度を通じて確実に近代の日本社会へと編入されていく一方で、彼自身の日常生活を律し、新たに形作っていくのは、地域社会で営まれてきた生業における社会関係や技能の習得状況による変化であったことを明らかにする。

【キーワード】 日記, 子供, 社会化, 学校教育, 生業, 漁業